

9 さが文化 2009年(平成21年)8月29日(土曜日)

美術

野中 耕介

県立博物館・美術館は毎年夏、各大学からの学芸員実習生(大学3、4年生)を受け入れている。今年も7月末～8月上旬の2週間、19名の実習生が当館で学んだ。実習内容は各分野

県内文化

文ならともかく、大学でも「自身のあらゆる感性を発動させ」自由に文章を書く」という体験、さらに評論について学ぶという機会は無数であろう。講義は実習生それぞれ独自の文章を発表してもらい、それらについて全員で感想を語り合う(批評し合う)かたちにした。世界、あるいは自身の何を見つめ、何を考へるか。そして、それを正しくあらわす(伝える)ために、どのようなかことが最もふさわしいのか。ことばを採ることの難しさと重みを知る。それは文章を書くことの出発点であり、すぐれた評論もそこから生まれてくる。ついても多くの話をしたが、そもそも評論(批評)とは何であり、また、なぜ存在するのだろうか。渡辺京一がいうように、一般に評論とは「(作品の)一種の出来はえ批評」、技術の優秀の評価であると思われているふしがある。しかし、はたしてそうだろうか。これについては、また稿を

「ことばには力がある」

の取り扱いと展示、ワークショップの補佐等多岐にわたる。それらの講師、指導はもちろん、私たち学芸員がつとめる。私の担当は近現代美術だが、今年も担当分野の講義に加え、少々大胆な試みとして、ものを書くことについて一文章・美術評論の講義もおこなった。論

皆、慣れない体験にとまどい臆(おく)するかと思いきや、型破りな内容が逆に新鮮に感じられたように、また、講義の前提が「各人の文章、ことの優れた点を見つけて」ということであって、楽しみながら、かつ真剣に「ことば」について論じている。今回の私の講義は、無限の未来に向かう学生たちに、まず、そうした書くことの原点(うぶん)と感動を伝えたい。もっとも、伝えたいことがありすぎて、かえって舌足らずな内容となってしまったのだが……。講義では美術評論に(県立美術館学芸員)

文化時評 2009